

ぶどう「紅伊豆」の省力仕立て法 - 垣根仕立て -

「紅伊豆」は、長梢棚を用いた長梢剪定法が主流となっている。この栽培法は、全国的に大粒種のぶどう仕立て法の主要技術となっているが、整枝剪定に熟練を要し、また頭上での作業が主体である。そのため、より省力的な栽培法である、垣根による省力仕立て法を確立した。



写真1 垣根仕立てによる栽培状況

棚の構造は改良マンソン棚を改良したもので、主枝を誘引する幹線は、地上1.3mで、作業の大部分を胸高の位置でおこなえる。また、トンネル被覆のできる構造とした。

主枝は2本とし、主枝から発生した結母枝を主幹方向に返して、2段目の張線に左右40cmの間隔をとって誘引する。新梢は3段目、4段目の張り線に誘引し、そこから先は下垂するに任せる。平均新梢長は、2.0mを目標とし、それ以上伸びる新梢は、8月上旬に先端を摘心する。



写真2 結果母枝及び新梢の扱い

表1 「紅伊豆」の垣根仕立てにおける収量構成

項	目	基 準
新梢本数	主枝1m当たり	10～11本
	10a当たり	3,300～3,700本
着房数	主枝1m当たり	9～10房
	10a当たり	3,000～3,300房
収量	主枝1m当たり	3.6kg
	10a当たり	1,200kg

着房数は、3,000～3,300房 / 10a。1房重は、350～400g、収量は1,200kg / 10aを目標とする。

本仕立て法のポイントは、樹勢の調節にあるので、発芽から開花期までの新梢の伸長状態をよく観察し、芽欠きの時期及び量を適切に判断する。